

紅い花

(四) 出合い 後編

琉 紅

潮平は笑い声を抑えて、刀を仕舞った。

「これは、失礼しました」

刀が鞘に収まるのを見て、村長はホツと胸を撫で下ろした。そして森に目をやり、

「美久の父も、ここに葬られているのじゃ。皆、死すればここに入る聖地の森、彼女が必死なのも仕方がない」

村長のその言葉を聞いた賢龍は、再び物狂おしく森の奥を見続けた。

美久は、軽々と馬にまたがった。

「この森を見る事は、この先の海を見るのと同じです。ご覧になりますか？」

「そうか、では、行ってみよう」

賢龍は美久の右足を強引に掴み、後ろに乗った。美久の背中に、彼のがつしりとした胸が接する。

「そなたは、面白い。私の心が読まれているようだ」

と、後ろから強い力で彼女の両脇を捕まえた。

美久は体に男性の筋肉から発する力を、初めて経験した。やがて、二人の乗った白馬は海岸に着いた。

白い砂浜がとてもまぶしく映り、海は果てしなく広がり、空とともに青色をなしていた。今、駆けて来た道は、緑で覆われている。

この場所は、白、青、緑、この三色しか存在しないのかと思われる程だった。

「これが世の果て、その海なのか」

「そうですね、人は死んだら、魂はこの海の果てに去って行くのです」

「この先には、あの世があるというのだな」

賢龍は遠くその水平線を、物思う表情で見つめた。

美久はしばらく間を取るが、何かを思い出したかの様に息を吸い込む。

自分の袖に手を入れて、その何かに触れながら、

「そういう事になっていますが、」

「なっている？」

賢龍は不思議そうな顔を向けた。

美久は真顔で、

「この先にあるのは、あの世ではありません。想像出来ない星の数程の国や、人々が暮らしているはずです。この浜に白い壺が流れてきて、その国からの沢山の穀物の種が入っていた神話が残っています。私は信じています」

「ほう、島から出たことが無いのに、明国を知っているのか」「目を見開き、心を解放して、周りを見直すのです。すると、

外の世界の使つかひに気がつきませう。そして、彼らに問うのです。すると、自分が居る場所が分かつてきます」

「見直す？ 使つかひ？」

賢龍は真上、そして周りを見ながらゆつくり視線を下ろし、地面、馬の足先を見る。

砂浜に埋もれて、大小さまざまな木の破片があった。

彼は馬から下り、それらを手に取る。

これと違って変わったものはなく、単に普通の木片だった。

「実は幸運にも、こんな物を拾ったのです」

美久は小さな花が彫りこまれた木の破片を袖から取り出した。

「大事に持ち歩いているのか。これは、何という名の花だろうか？ これまで見たことがない。きっと本物はとても美しいのであろう。明国にあるのか？」

「たぶん、もつと遠くの国です」

「これを、私にくれぬか」

「どうぞ。お気に召したのでしたら」

賢龍は花の木片を顔に近づけて、色々な方向から眺めては確認した。

「この花は紅色か。そなたの神人として情熱と同じ色だな」
傍らにそれを置くと、彼は服を脱ぎ始めた。

「今度は、海の中を調べてみよう、もつと見つかるかもしれない」

鍛えられた上半身には、所々に傷跡が痛々しく残っている。砂浜を蹴飛ばして海に飛び込んでいく。まるで子供にかえたようである。

従者達も彼に追いつこうと、服を脱ぎ始めた。

「どこまでもついて行くのね」

と、美久と村長の笑い声が、水の跳ねる音に合わさった。

他の武士らも腰まで海水につかり、賢龍を取り囲んでいる。彼は、好奇心を刺激された子供のように、我を忘れて水中に沈んでいるものを探していた。青い海に、肌色の体が遊び、白く輝く波しぶきを立てて、砂浜から右手の岩場へと向かった。

その時、

「痛っ、何か、噛み付いた」

賢龍は右足を押さえるような格好で水中に沈みこんだ。

「足が、足が熱い」

「海蛇だ」

村長の叫びが浜辺に響き渡った。

今までと打って変わって、騒然となった。

取り巻きたちは、各自の刀を取り出して、海中を手当たり

次第切り込んだ。

ある者は海面を叩いた。海蛇いづなが、賢龍の足に噛みついたのだ。猛毒が体に入り込む。

波しぶきが激しく舞う。

美久の目には、水中を物凄い勢いで泳ぎ去って行く黒い陰が一瞬、写った。

「もう、蛇はいないわ!」

と、美久の大声。

賢龍は従者に背負われ、砂浜に寝かされた。

「どうすれば、よいのだ! ええっ」

従者が口々に村長を攻め立てた。

「なぜ、こんな浅瀬に、イラブが。大変な事になったぞ」

と、村長は頭を抱えてしゃがみ、顔を上げた。

「止血し、毒の回った部分を切るしかない。毒が体中に回る前に、ひざから下を急いで切り落とすしか……」

賢龍は啞然としたその顔は、みるみるうちに青ざめていった。

「そんな事できるわけない。潮平、何とかしろ!」

潮平を中心に取り巻き達は益々騒ぎだした。

賢龍は自分で右足ひざの上を、布の切れ端で縛りつけた。しかし毒による熱さとしびれを感じ、額に冷や汗が吹き出

ている。

賢龍は、覚悟を決めたかのように、

「誰か、刀を」

その一言に潮平の顔も真っ青になり、村長は、あたふたとした。

美久は静かな顔で、賢龍の脱いだ着物の下から彼の刀を抜いて近づいてきた。

「お前が、切ってくれるのか」

「大丈夫です。私に、お任せください」

と、刀の向きを変え、村長に柄を差し出した。

「ここを、持っていてください」

美久は自分の帯を解いた。

それを使って、彼の太股、膝を二カ所、止血した。従者等は為すすべも無く、言われるままに従うしかなかった。村長は美久の側で、柄を持って立っているのがやっとだった。

しゃがみこんだ美久は刀の先を指先でつまんだ。

刃は日の光を反射し、オレンジ色となり、柄も赤糸が目立って輝いた。

「さあ、早く切れ……」

と、その言葉を合図に、美久は賢龍の足に刃先を近づけた。ふくらはぎに海蛇の歯の二点間を繋ぐように、サツと切り

込んだ。

「うっ」

賢龍は毒による熱さと、刀による痛みが加わり、極まって声を発した。

血が勢い吹き出した。

その穴に美久は唇を当てて毒の混じった血を吸い込み、砂浜に吐き出した。

「これも剣術、お任せください」

賢龍は、足元に必死に毒が含まれている血を吸い出す美久の姿を見つめた。

彼女の頬、唇に血が染まる。右の太股、その奥へと血が滴り落ち、噛まれた穴から変色し腫れた血管をたどり、途中で、刀で切り込みを入れ、血が染み出てくる。

美久はふと、自分の下唇が痛み出したのを感じた。やはり、さっきの転倒で小さな傷がついていたのである。

しかし、美久はそれを吸い出す作業を繰り返した。

砂浜に赤色が足され、染み込んでいく。

美久は左手の掌で浜を叩いた。賢龍に襲いかかる死を、忌み嫌ひ抗議しているようだ。あるいは、『命が去っていくのを止める儀式』とも言えよう。

村長は、感極まって涙を流した。

美久が神の使いに見えていたからだ。

美久は彼の膝から刀を遠ざけ、静かに唇を離した。そしてそのまま賢龍の足の上に、倒れ込んだ。賢龍も、体に痺れが残りが利かない。意識も定かではない。

騒ぎを聞きつけた村人たちが集まってきていた。

その中から美久の母親が飛び出す。

「美久！」

足が砂に取られながらも必死に駆けつけ、美久を抱き起した。

後からやってきたヌルが、美久の様子をみて、

「大丈夫じゃ。酸欠と、毒が僅かに美久に入ったのだ。軽いショックを受けている」

ヌルは、美久の腹部と背中を手を当てて、呼吸をさせる動作をした。

そして、両脇を抱え、上向きに寝かす。

徐々に美久の顔色が良くなってくる。

美久の額に手を置く。

「えいっ」

と、ヌルは彼女の頭部を揺らすように。

長い時間に感じた。

ゆっくりと美久の目が開く。

へっへ